



Member's Open Space

浅草の思い出 (昭和初期の)

●美唄歯科医師会会員
雨田 実



年をとったせいかテレビドラマで隅田川の水上市のバスシーンをみると、昭和初期の頃の浅草花川^{はながわ}と戸に浅草で初めてのデパートの松屋が完成し、その二階に東武電鉄が乗入れた頃(昭和6年)であったろうか。それ以降は浅草では珍しかったアドバルーンが幾つか揚って、いつも隅田川の上を空高く流れていた頃にタイムスリップしてしまう。ドンの思い出。正午を報せる、号砲のことである。宮城で近衛兵が空砲を撃っていた、と父から教えられたものである。テレビはもちろん、ラジオもあまり普及していなかった頃であったから、時報代りに貴重な役割りを果たしていたことは事実であったろう。私にはあのドーンという^ま間のびした音が、柔らかくひびいてきた印象と、その音でゆるやかな時間の流れを知った庶民の生活へのなつかしさが、たまらなく思われてならない。

ドーンという音の流れてくる東京の空は明るく広びろとしていた。東北の方には遠く筑波山、北の方には東京電力火力発電所の四本煙突(俗にいうお化け煙突)が、西の空には富士山が良く見えた。夕方になると、どこからともなく小さなコウモリがたくさん飛んで来て街中をとび交ったし、秋には真赤な赤トンボが大群で空をおおった。当時の浅草(下町)は自然も人もノンビリしていたものである。ドンは、いつから鳴らなくなったのだろうか?一説には昭和4年4月までで5月からサイレンになったと聞かすが、私にはもっと後まで鳴っていたように思えてならないが、惑いは子供

の頃の私の生活の中で、ドンの占める印象の重さのせいかも知れない。

浅草公園(観音様の境内)は昼も夜も賑やかで夜は六区(映画館街)に人が集まるが、昼間は観音様中心で、仲見世の人通りはいつも同じ位混んでいた。五重塔の廻りから、お堂のうらの広場から奥山にかけての^ま香具師たちの舞台である。2本の棒を2米程はなして、地面に突立てて、その先に日本紙の輪をさげ、竹の棒をこの輪を通して横につるす。この竹の中心部を木刀で、ヤッと気合と共に叩いて紙を破らずに竹を折って見せるわけであるが、^{のうがき}能書ばかりならべていて、^{れっぱく}裂帛の気合のほうはなかなかやってみせない。刺子の襦^{さしこ}袴^{じゅ}袴^{ばん}に紺木綿の袴^{こんもめん}を付け晒^{はかま}の鉢巻^{さらし}きをしている筋骨たくましい男だが何を売っていたのであろうか。

源水^{げんすい}の独楽^{こま}廻しは至芸だった。大きな独楽が廻り出すとそれだけで取り巻いていた客が、いっ斉に「ほお」とかん声をあげる。刀の刃渡りから紋付羽織の袖と襟を通して反対側の袖口まで、見ているほうが息も付けない。それが一転して治療の実演となると、これがまた実におもしろい。お使いの途中で道草を喰っているような小僧さんを人の輪から言葉たくみに引っぱり出して、アッという間に虫歯を抜いて見せる。その他に、ガマの油やバナナの叩き売り、暗記術もあれば大道演歌もあった。演歌師は壮士風のなりでバイオリンを弾き、枯れすすきや籠の鳥を、また金色夜叉^{こんじきやしゃ}を唄っていた。泣き売りといって、工場や会社の倒産を

うったえ、その品だから泣く泣く安く売ると、万年筆などの売りかたは、変な関西弁が面白くて「わてえは三越の番頭はん、損得はかめしまへん」というのを覚えてきて、家でやって見せて、叱られたことを今でも覚えている。ある時、猿廻しの芸を見ているとき、猿と猿廻しの呼吸がピッタリ合って思わず引き込まれる「え、なに、オゼゼが少ないと。今日のお客はけちんぼだ。そんな失礼なことは、いっちゃいけないよ。よし仕様がな。それじゃもういっちょ、トンボを切っただけで見るか。ヨシソレ」といったその時である。私の隣に立っていた娘さんが「アッ」と叫んで後頭部に手をやった。見ると腰まで垂れていた豊かな黒髪が襟足の下で全部見事に切り取られていた。恐らく娘さんの髪をうしろから束にして握ると共に、かくし持っていた刃物で瞬時に切り取り、当人が後を振り向いたときには、もはや群衆の中に隠れてしまったのであろう。その早業、その腕の確かさには本職の仕事と驚くほかはなかった。これは痴漢の仕業ではなく、泥棒というより一種の掬摸とでもいうものであろうか。声も出ずに涙ぐむ娘さんに見物の同情が集まった。悪い奴がいるもんだ。きっと鬘屋に売るんだよ。本物は高く売れるというからと大勢の人が同情しても後のまつりであったが、昭和初めも不景気なことでは現在以上であったようである。

駄菓子屋と前の道。下町の子供達には、駄菓子屋という呼び名ほど嬉しいものはなかった。そこで売っているものは、まさに駄菓子としかいいようのない物である。店は間口も奥行もせまい中を店先には長方形の平べったい箱に、ガラスの蓋をしたものが並んでいる。その後方にはガラスの広口ピンにアルミのフタの付いたのが並んでいて、その中に駄菓子が入れられていた。じつに色々なものがあった。円筒形の麩のようなものに黒砂糖が塗ってあるもの・ねじれたおこしのようなもの・ニッキ・飴ん棒・飴玉など思い出すと切りが

ない。剣玉・べいごま・めんこ・ろう石・火花・おはじきなどの遊び道具は別に脇の方に置いてあった。こういう駄菓子屋は下町の子供達の社交場でもあった。子供達には地域により、年齢により、また性分によって幾つものグループがあった。それが駄菓子屋を中心にして離合集散する。何かのことでグループの結束が固くなることはあるが、それが対立や抗争に発展することはあまりなかった。それは駄菓子屋の店番のおばさんが、子供達のことをたえず親身になって考えて商いをしてきた(子供達に不相应な金銭の使いかたをさせない)。若しそういう子供が来ると必ず父兄に連絡したり、子供に親身になって注意してくれる駄菓子屋のおばさんが大部分であったことは、下町の子供達のためにまことに喜ばしいことであったということが出来る。駄菓子屋で使う子供の小遣いは、その時分は、2銭か3銭であった。小学生低学年程度で月決めで小遣いをもらっている子供は昭和ひとけたの下町にはほとんど居なかった。広口ピンに入った飴玉が3つで1銭のころであったが。板チョコや箱に入ったキャラメル等は高級品のランクのもので駄菓子屋にはないものであった。1銭と2銭は銅貨で2銭の方が少し大型であり、5銭と10銭は白銅貨で、50銭は銀貨で縁に並んだ筋が刻んであるので、これをギザと品のない呼びかたで呼んだりした。10円の札を大人達は、いのししといった。札に和氣清麻呂と猪の絵のついた大きな札を見せてもらったのを覚えている。金貨というものを見たいといったら、父がそのうちになどいい、半月ぐらい待たされてから、或る日やっと拝ませてもらった思い出がある。あれは何円の金貨であったのか小学1年の時であったことだけしか覚えていない。来月は浅草六区の映画街の戦前期の頃を綴る心算であるので、乞うご期待!!